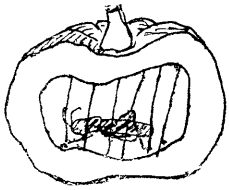
作曲のヒント

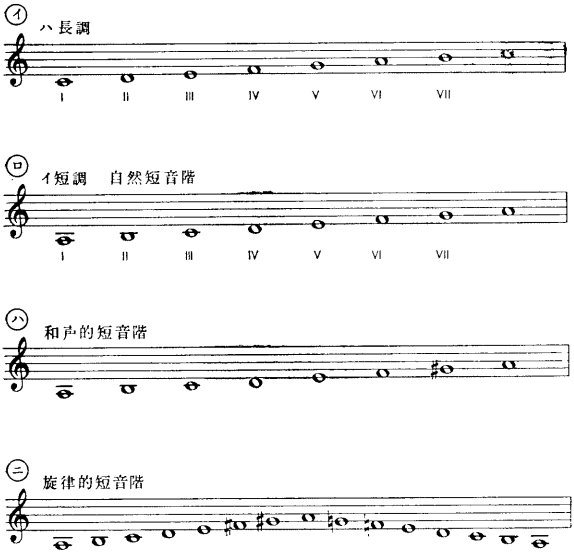
（四）

長と短



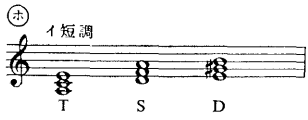
外山友子

前号で、六の和音、四六の和音がおわかりになったと思いますが、これはT、S、Dの和音ばかりでなく、二度上の和音、三度上の和音など、すべての三和音に作れるものです。また音を重複するときには、最もよいのは根音を重ねることでした。その次によいのは第五音の重複ですが、これらは長三和音と短三和音の場合なのです。

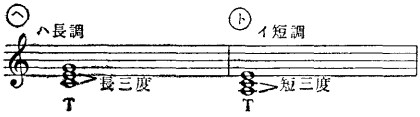


ここで、長三和音、短三和音というのが、初めて出てきましたが、音階から説明いたしましょう。

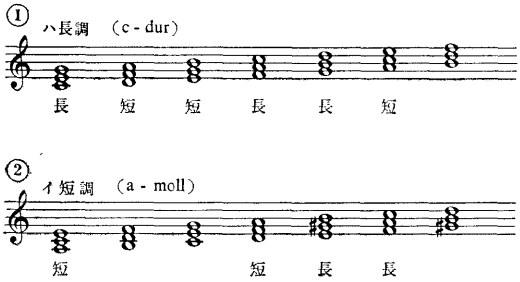
短音階には、自然㋺、和声的㋩、旋律的㋥の三つに区別されますがこのうちの和声的を用います。今この音階から、長調の時と同じように、三つの主要な音をとり出しますと、I度、IV度、V度ですから、ラが主音、レが下属音、ミが属音となります。この三つの音の上に、それぞれ和音を作りますと㋭ラドミ（主和音T）、レファラ（下属和音S）、ミソシ（属和音D）の三つが出来ます。が、Dのミソシは和声的短調ですからソにがつきます。

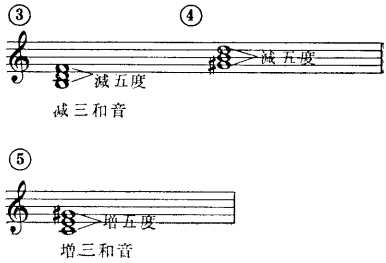


この三つのTSDは長調のTSDとは、全く感じの異なったものですが、どう異なっているのかを、一しょに考えてみましょう。先ずTをとり上げてみますと、ドミソの方㋩は、根音と第三音との音程は長三度ですが、ラドミ㋭の根音　第三音は短三度です。これだけで、もう長と短の相違がはっきりしているわけです。Sも同様です。長調の方はファラドで、音根　第三音は長三度ですが、短調のレファラは、レファが短三度になっています。つまり、第三音が、根音に対して、長三度になっているか、短三度になっているかによって、その和音が、長三和音か、短三和音になるのです。しかし、短調の和音がみな短三和音で、長調の和音がみな長三和音というのではありません。Dは、どうでしょう。長調のソシレ、短調のミソ♯シ、どちらも長三和音です。これら三つの和音はみな、根音と第五音の音程は完全五度ですが、根音と第三音との関係だけで、長、短の区別がついてしまいます。



では次に、長調、短調における各々全部の和音をしらべてみましょう。（①②）各三和音の長、短がおわかりになりましたでしょう。が、今、下に長とも短とも書かなかった和音は、そのどちらにもはいらないのです。なぜかというと、これらの和音の、根音　第五音の関係は、完全五度でないからです。シレファの和音のシファの音程③と、ソシレの♯ソ—レの音程④は、完全五度よりも半音せまい音程で減五度になっています。それ





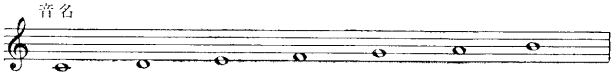
で、これは、根音　第三音の関係が短三度なので、短三和音と言いたいところですが減五度の方をとって、「減三和音」といいます。反対に、トミソ♯ドの和音は、ト　ソの音程が完全五度よりも半音ひろい音程、すなわち増五度ですから、「増三和音」となります。

これらの長三和音、短三和音、減三和音、増三和音を、楽譜で見て区別すると同時に、必ずピアノをひいて、耳でその和音の音色をおぼえて下さい。曲を作る時、どんな和音をつけようかと思う時、この感じを思いうかべることが出来るように。

次に、短調の歌を、少し研究してみましょう。子どもの歌に短調のものが少ないのは、その性格上必然的なことですが、ここに例を引こうと思って、いろいろ思いうかべてみましたが、何と短調の歌の少ないことでしょう。これはと思って歌ってみますと、たいてい五音音階のものが多く、完全に短調のＳＤＴを持っている歌は、なかなかありませんでした。

ここに、どなたもご存じの、伴奏もやさしい歌「こがね虫」を例にとりました。これはヘ長調の調子記号ですが、そのドが主音ではなく、ラが主音になっていることがわかります。ラが主音のものは長調ではなく、短調なのです。そのラは、音名では「ニ」ですから「二短調」になります。

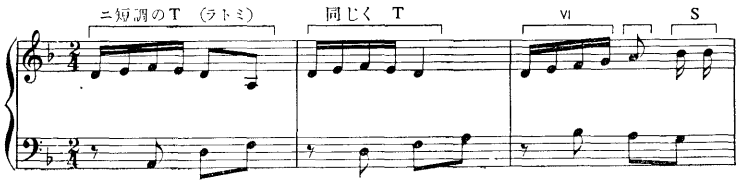
このように、ヘ長調と二短調との関係を、平行調と言います。つまり、ハ長調と、そのラの音、つまり「イ」からはじまる音階、イ短調とは、平行調なのです。



	c	d	e	f	g	a	h
	ツェー	デー	エー	エフ	ゲー	アー	ハー
♯	cis	dis	eis	fis	gis	ais	his
	ツィス	ディス	エイス	フィス	ギス	アィス	ヒス
♭	ces	des	es	fes	ges	as	b
	ツェス	デス	エス	フェス	ゲス	アス	ヘー

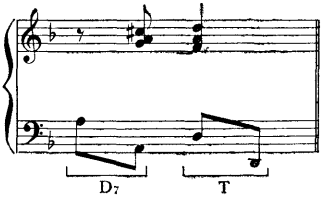
ここで、階名と、音名が出てきましたが、今まではほとんど、ハ長調でお話ししてきましたので、ドレミ・・の階名で説明しましても、混同しないですみましたが、♯や♭がつき、いろいろの調子記号がついてきますと、音の種類が増してきて、階名では都合の悪いことも多くなりますので、以後は、なるべく音名で申しましょう。ハニホヘト・・に♯や♭がついて、嬰ハ、

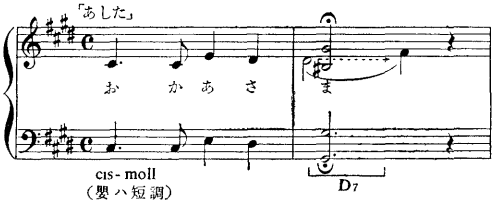
変ハといいますが、音名として理論的に便利なのはドイツ音名なので、上の表でおぼえて下さい。♯がつけばisをつけて、cis、disというふうに、♭がつけばesがついてces、desとなりますが、eとaの音は、母音を重ねないで、es、asとなり、Hに♭のついたのはbベーになります。ついでに、長調は、dur ドウアー 短調は、moll モール もおぼえておきましょう。

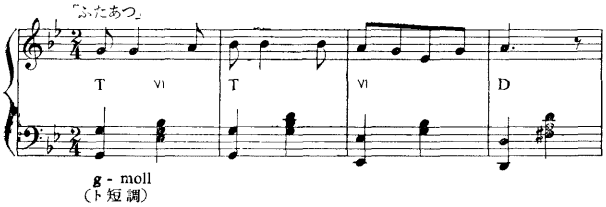


次から次と、脱線してしまいましたが、こがね虫の歌の譜をごらん下さい。このような十六分音符に、ひとつひとつ和声をつけていてはたいへんですから、こんな場合は、一小節が一種の和音で出来ていると考えればよいでしょう。第一小節のメロディのラシドシラーミーは、経過音シが入っているだけでラドミ（音名では dfa）つまり、二短調（d-moll）の主和音（T）で、低音は、ラドミの第一転位の分散和音と考えられます。

次の小節も同様にTから出来ています。その次の第三小節目は、低音がファ（b）ですから、メロディのラシドレのラ、ド をとり、ファラド という和音になります。この和音は短調では、VI度上の和音です。そして次の音にメロディも低音もミで、オクターブになり、その次は、メロディがファで、低音がレ、これは、レファラ とも考えられますし、シレファとも考えられますが、レファラの音のラが省略されたと考えた方が妥当です。というのは、このように、三和音の中の一つの音を省略する場合は、決して根音は省略すべきではないからです。レファラは短調ではVI度上の和音、Sとなります。このようにして、この曲の楽譜をごらんになって、この要領で、何の音で出来ているかをお考え下さい。大体、このあとも、T（ラドミ）とVI（六度上の和音）位でしょう。単純なメロディなので、伴奏も単純になりD（ミソシ）がありませんが、下の後奏をごらん下さい。最後の小節、低音はミ（a）右手の音は レミソ♯（g a cis）で、ミ♯ソシレという属七の和音（属音上の四和音（D_7）から出来ておりますが、ミ♯ソシレ（a cis e g）の根音ミ（a）が重複







されていて、ソ♯がありレがありますけれども、シが省略されています。これは先程、三和音でも述べた通り、根音も第三音も省略してよい音ではありませんので、第五音を省略しています。七度の音、レを省略してはまた、属七（D_7）になりませんから勿論省略は出来ません。

上右の曲は cis-moll（嬰ハ短調）で二小節目の音はミ♯ソ♯シの音すなわちDですが、そのシの音がレにいっていますから、ミ♯ソ♯シレD_7であるといえます。

上左の曲は g-moll ですがこの他ご自分でいろいろ曲をごらんになって、dur や moll の和音をおしらべ下さい。